

## 第5章 同一性発話の意味論

暫定的提案：同一性発話の意味を理解すること＝両辺の名詞句を理解し、それらの指示対象の同一性を理解すること

### 1、名詞句を理解するとはどういうことか

#### (4) 指示対象の理解は可能か (つづき)

##### (b) 名詞句の意味理解と対象指示の隔たり

- ・ある対象を特定する方法には、とりあえず次の三つが考えられる。
  - ①より包括的な対象から出発して、それを適切に限定して、その対象にたどり着く
  - ②より限定された対象から出発して、それを適切に拡張して、その対象にたどり着く。
  - ③ある対象から出発して、それとの関係をたどって、問題の対象にたどり着く。
- ① は平面図形から正三角形にたどり着く場合。確定記述句によって対象を特定しようとする場合。
- ② は、これやあれから、普遍的な対象「リンゴ」を定義しようとする場合。
- ③ は、ソクラテスから、記述句「ソクラテスの妻」の対象にたどり着こうとする場合。  
(あるいは、この①②③は、③の「関係」の下位区分として考えることができるかもしれない。これらは、いずれも、ある所与の対象から出発している。これの遡りの無限遡行を回避する必要がある。)

#### ・記述句の場合

「村上春樹の今年最初の作品」という語句の指示対象にたどりつくには、この記述に使用される語の理解が必要である。記述句の意味を理解するには、それに含まれている固有名、指示詞、一般名詞の理解が必要になる。しかし、これらを理解して、記述句の意味を理解したとしても、指示対象にたどり着けるとはかぎらない。

#### ・固有名と一般名詞の場合

固有名と一般名詞の指示対象にたどり着くには、定義を知る必要がある。その定義は、同一性言明によって与えられる。しかし、定義が与えられても、対象にたどりつけるとは限らない。

「ヘスペラス＝フォスフォラス＝金星＝明けの明星＝宵の明星＝太陽系第二惑星」

これらがわかっても、ヘスペラスにつけるとは、限らない。たどり着くには、「あれがヘスペラスだ」といえる必要がある。では、「あれ」はどのようにして対象を指示するのだろうか。

#### (5) 指示詞の意味と対象の指示

##### ■指標詞と指示詞と代名詞の区別

「指標詞」は特定の種類の対象だけを指示する。「私」や「あなた」は人物しか指示しない。「(彼)や「彼女)や「彼ら)もそうだが、これらには前方照応の用法がある。それゆえに、これらは代名詞であり、指標詞ではない。

「ここ)や「あそこ)は場所しか指示しない。「(そこ)もそうだが、「そこ)には前方照応の用法がある。それゆえに、これは「指示詞)である?)

「今)や「今日)や「昨日)は日時しか指示しない。「(2014年12月5日)もそうだが、これは記述句である。)

- ・指標詞は特定の種類の対象だけを指示し、直接指示の用法だけを持ち、前方照応の用法を持たない。
- ・指示詞「これ」「あれ」「それ」「それら」は、様々な対象を指示し、直接指示の用法と前方照応の用法を持つ。
- ・代名詞「彼女」「彼」「彼ら」「彼女ら」は、特定の対象だけを指示し、前方照応の用法しか持たない。「これ)や「あれ)は直接指示と前方照応の両方の用法をもつが、代名詞は前方照応の用法しか持たない。

## ■指示詞「これ」による指示

これは次の二つに分けられるだろう。

- (a) 指さしなどを伴うことによって一つの対象を指示する。
- (b) 前方照応によって、一つの対象を指示する。

(a) 「それをとってください」のように、「それ」によって対象を指示できる。しかし、これは背景知識や付帯的な情報を前提する。背景知識や付帯的な情報の共有がなければ、クワインの「ガバガイ」のように「それ」が何を指示しているのかを理解することはできないだろう。何よりも必要なのは「それ」と発話することによって、何かを指示しようとしていることを伝えることである。その意図を理解したなら、受け手は、話し手がその状況で何を指示しようとしているのかを推論することができる。「彼は「それ」で何を指示しようとしているのだろうか」

これに答えるとき、人は、話し手の視線や指さしなどの身振りを手掛かりにしようとするだろう。視線や指さしも、指示対象の絞り込みに利用することができる。しかし、それだけで指示対象を一つに絞り込むことはできないだろう。

### (b) 指示詞や代名詞による前方照応の意味と対象の指示

・「私は今日リンゴを買ってきました。それそのリンゴを食べましょう」というとき、「それそのリンゴ」とは、前文の「リンゴ」である。「それ／そのリンゴ」が指示しているのは、話し手が前文で指示している対象リンゴであって、前文のなかの「リンゴ」という語ではない。

(このようにいえるとするば、前文に出てきたものが不定冠詞のついた名詞であっても、指示詞で言い換えられるとすると、前文に出てきた、不定冠詞のついた名詞句もまた、対象を指示していたということだろうか?)

・代名詞は、「私は今日ある留学生に会いました。彼女はイタリア人でした」というように、前に登場した名詞や名詞句が指示しているものを指示する。しかし、「彼女」は前文の「ある留学生」の代わりではなく、表現するならば「その留学生」の代用である。しかし、「彼女」が指示するのは、「その留学生」が指示する対象である。

ここでは「彼女」で話し手がある女性を指示しようとしていることがわかる。そして話し手が、この文脈で「彼女」で誰かを指示しているとする、それは前文のある留学生であると推測できる。

・固有名や一般名による指示を定義したり学習したりするときには、同一性文の使用が必要である。その後の使用では、学習時のこの同一性言明を前方照応することによって、指示を行う。

### ・固有名による指示

固有名の定義や学習は「この川を淀川と名付ける」「この川は、淀川である」などの発言で行われ、これは「この川の名前=『淀川』」「この川=淀川」などの同一性言明によって行われる。「この川」という語句で対象を指示し、その対象を「淀川」という固有名で指示する。「淀川」という固有名を使用し始めたときには、これを学習した時の同一性言明を想起しておりだろう。「これが、あの淀川だ」とか、「淀川は、あの川だ」というようにして想起している。これは、「淀川」を学習した時の用法に前方照応している。

### ・一般名による指示

一般名の場合にも、それを学習したときのことを想起しているなら、学習時の用法を前方照応しているといえる。

## ■指示なしで文の意味を考えることはできない

デイヴィドソンが指摘したように、語や名詞句が使用されるのは、文の構成要素としてである。

したがって、語による対象の指示が文による言語行為の一部としてのみ可能になることを認めよう。しかしここから、語は対象を指示しないと、指示なしで言語の意味を考えることができるということは、帰結しない。

・確かに指示の導入や学習は同一性言明によって行われる。「淀川=この川」によって、「淀川」を学習するとしよう。仮に「A」の指示対象を、「A=B」で学習するためには、「B」の指示対象を事前に理解していなくてはならない。「B」の指示対象を理解するためには、例えば、その中に含まれている表現「C」の指示対象の理解が前提されるとしよう。そして、「C」の指示対象を学習するときには、「C=D」によって学習するのだとすると、そのためには「D」の指示対象を事前に学習している必要がある。こうして、無限にさかのぼることになる。

・この無限遡行を避ける一つの方法は、遡行を循環させることである。

・もう一つの方法は、「それ」や「これ」などの指示詞での説明を利用することである。

では、指示詞による対象の指示は、どのようにして行われるのか。ここでは、背景知識と付帯情報と、視線や指さしなどの身振りが必要である。

そこで働いている陰伏的な背景知識や付帯情報は、必要に応じて言明で明示化できる。つまり、それに関して問われたら答えることができるだろう。しかしそのすべてを明示化することは難しいだろう。なぜなら、明示化した言明を理解するために、さらに別の背景知識や付帯情報を必要になるからである。

指さしなどの身振りも、それを次のように明示化できるかもしれない。「これ=視線の方向にあるもの、指さしの方向にあるもの、提示しているもの」などとの同一性発話になっているとみることができるだろう。しかし、この同一性発話を理解するためには、またしても指さしなどの身振りを必要とするだろうああ

### (6) 指示と共同注意と同一性言明

・指示は共同注意において成立する。

・共同注意を明示的に表現すると同一性言明「私が見ているもの=あなたが見ているもの」となる。この同一性言明が共有知となることによって、同一性言明によって、他者に語句を用いて指示することが可能になる。

#### (A) 指示はいかにして成立するか

##### (a) 相手の指示を理解するために必要なこと

デイヴィドソンは、人が何を言おうとしているのか解らなくても、それに先んじて何かを主張しようとしていることは解る、と主張した。これと同様に、われわれは人が何を指示しているのか解らなくても、何かを指示しようとしていることは解るといえるだろう。

このことがわかるならば、相手の指差しなどの振る舞いや、言葉や、そのときの状況などから、相手が何を指示しているのかを、推論で突き止められるだろう。またそれができないときには、相手が何を指示しているのかを質問することもできる。ただし、<何を指示しているのかわからないのだが、何かを指示しようとしていることは分る>ということが成り立つためには、すでに指さしや言葉による指示を習得していなければならない。この習得は、具体的な指示の習得なしには不可能であるから、すでに別の具体的な指示を習得していることになる。

(では、最初の指示はどのようにして理解されたり、行われたりするのだろうか。これはおそらく共同注意からの発展によることだろう。別途考察。)

##### (b) 指差しと共同注意

発達心理学によれば、指差しを理解するのは、人間だけであり、指差しは、共同注意への誘いである。自分がある対象に注目しており、他者にもその対象に注目してほしいときに、指差しをする。相手の視線を確認して、

対象を確認することによって、同一の対象にふたりで注意を向けていることを確認する。

では、他者にもその対象に注目してほしいのは、どんなときだろうか。他者にそれをとってほしいときだろうか。それとも、他者と一緒にそれで遊びたい。それが驚くべきものなので、他者にもそれを知ってほしいときだろうか。心理学者の観察報告によると、指差しは、それをとってほしくて、始まるのではない。指差しは、他者と一緒にそれに注目したいために生じる。指差しによって、成立する共同注意を楽しむのである。

(c) 指差しと一語文

指示は指さしとして発生する。指差しの理解は、共同注意として成立する。例えば、幼児に対して、大人が天井の蛍光灯を指差して「デンキ」と言うことは、語を発話することではなく、文を発話することである。なぜなら、その発話には真理値があるからである。この発話が文の発話になることは、つぎのように理解できる。

大人がある対象を指差しながら「何ですか」と問い、幼児が「デンキ」と答えたとしよう。この返答を完全文の言明に直すと、これを次のように書くことができるだろう。

「<指差し>=デンキ」

なぜなら、指差し行為はある種の言語、つまり身振り言語だと考えられるからである。ここでの、指差し行為+語の発話は、ある種の同一性言明として解釈できる。それゆえに、この一語の発話が真理値をもつことになる。

因みに、われわれは書き言葉、話し言葉、手話、モールズ信号、手旗信号などのほかに、身振り言語を持っている。例えば、

- ①決定疑問を問われて、首を縦に振ったり、横に振ったり、両手を挙げたりすること、
  - ②賛成を表す挙手や、話したいということを伝える挙手、
  - ③指で数を示すこと、
  - ④対象や相手や自分を指差すこと、
  - ⑤手をあげて人差し指と中指を曲げて、引用符を示すこと
- などである。

対象を指差しながら「これは何ですか」と問われて「デンキ」と答えときには、その返答の同一性文は「これ=デンキ」となるが、「これ」による指示にはつねに指さしなどの身振りが伴っているのでより正確には

「<指差し>+これ=デンキ」

とすべきかもしれない。

(d) テーゼ「指示は、問答の中で成立する」

①指示の成立=同一性発話の成立

指示の成立=二つの表現の指示の同一性の主張、つまり同一性発話の主張の成立

②同一性発話の成立=問答の成立

問答が成立するならば、そのとき同一性発話が成立している。

同一性発話が成立するならば、それは問答の結果としてである。

「あなたの車はどれですか」「あれです」

「私の車=あれ」

①と②を証明できれば、そこから次の③が成立する

③指示の成立=問答の成立

この③がテーゼである。

・問答において、指示が可能になるのは、次の三つによる。

(i) 問いと答えによって提供される二つの指示表現がある。

(ii) この二つの指示表現が同一の対象を指示することが返答者の信念（ないし意図）である。

(iii) 上記の意図1が質問者と返答者に共有される。

(i) について：問いの中の「あなたの車」は何を指示しているのだろうか。質問者は、その車がどれであるか知らない。しかし、「あなたの車」でその場に一台あると想定する相手の車を指示している。しかし、この指示表現の意味を理解するだけでは、ひとは対象までは辿りつけない。

返答者の「あれです」という発言も、発言するときの返答者の眼差しの方向や、指差しの方向にある対象を指示しているのだろうと推測させるだけである。しかし、これもまた対象を取り出すには不十分である。

(ii) について：この二つ、つまり「あれ」の指示対象と「あなたの車」の指示対象が同じであることが返答者の信念（ないし意図）であることから、返答者が聞き手に指示しようとしているものが、かなりの確実性で限定される。

(iii) について：聞き手 A が、ある表現の指示対象を取り出すのは、話し手 B が、聞き手 A がある表現で何かの対象の取り出すことを意図していることを理解するからである。そのような B の意図の理解が可能になるのは、A の B への問いが指示を求めているので、B の返答の発話が、A が求めていたものを指示しようとする意図しているのだと理解することが可能になるからである。